

公事根源集釋

中



不動倉 ○江次第四

不動穀有古委新委之
之二色不動倉穀若干
石積若干石也

○康保元年官符天曆
官符以正稅遺爲不動

○延喜式十二中務省
式云凡諸國所進不動

倉儲者官副國解下省
省邸勘收庫若應出下

者待官符下然後出充
七瀬所其數多此記

名々洛中七瀬号又小
七瀬去云本七瀬上云六

難波 田菟島 河後
攝津 大島 橋小島

山城 佐久那谷
幸崎 近江此六七瀬ト

モ云也

三六 古書奏

○後書書の奏色九月小あえふれと一記日
浅え〜ひり〜大治新〜奏と備國乃
編給〜不辨れ倉ひ〜んと〜あ〜なる
改始小あひ〜る又也大治陣小は〜さ〜
二種又と〜れき〜き〜り〜りてのら
御殿〜て奏す〜る也〜事い〜る也
よあ〜り〜と

三七 七瀬御被

後醍醐十五日ヨリサキヨ日ニ御被ヲコナハレ五位殿上人使ヲ瀬向フ
是ハ毎月乃事也七瀬といハレ合ニ除カテ門

八言良原

大形稜具也。釋日本
紀云人形者所謂素戔
鳴尊之濫觴拔手足之
爪贖其罪身代之義也

靈所七瀬。拾芥三靈
所トバカリ子仁治三四
在成説注付之

公事根原

中津門中津門大炊津門大炊津門一系乃丁系一系乃丁系終と七
瀬瀬は乃也陰陽師人形と奉る至之津い
きとけ津力とまて一始一敵之法
竹島竹島の法而け川原小ひよくつりまの道
いま上津上津極物とめとまの物一海そり外
こ〜〜事なり七十代後冷泉院後冷泉院津時
海月海月小靈小靈七瀬の津七瀬の津後とまなりとれ
而〜耳耳敏敏河合河合東漸東漸松崎松崎石部石部西西一軒
川川河河也也
拾芥下本朱雀門前タス 北河瀬 西園寺東仁寺高野 北野北

三人 火災津祭

あまの月あまの月〜〜事也陰陽師陰陽師是〜
おこなふおこなふ火事火事と少格少格之功能之功能わら〜
董仲舒董仲舒の祭書の祭書とりの物の物おこな〜

三九 代厄津祭

是も月是も月〜〜ににかこれと教と教〜は賜母賜母の法
とも〜〜と終と終とば〜〜ききお書お書り
終終と〜り

二月

四一 釋奠

上丁日

是の年是の年お〜〜二月と八月二月と八月〜〜ありとれ

十位

公事根原

○論語先進篇云德行顏淵閔子騫冉伯牛仲弓言語宰我子貢政事冉有季路文學子游子夏
宣穩座。江次第釋奠又說上卿以下著宴座履宴座官廳也上卿東參議西辨以納言外記史而紀傳博士面東又云王御移著穩座上南參議面辨以納言面東在參議後文臺小床子在中央儒者文人北面床子二重抄云穩座者非嚴重威儀之座自他舒懷故曰穩

釋奠昨トモシラ
後醍醐羊中行釋奠昨ト昨モシラカキテ

禮記王制——王制此文

○禮記文王世子云凡始立學者必釋奠于先聖先師及行事必以幣又月令仲春之月上丁命樂正習舞釋菜
○史記孔子曰受業身通者七十有八人素隱曰孔子家語亦有七十人唯文翁孔廟圖作七十二人

公室良原

丁の日はあはれにかさくつと一日能國
忘れぬ法家なりとよりあはれの中丁小わら
大學寮ふくむかきけり孔子なび小十哲
乃新法と法に孔子に辨れ紙云あるまい
江次第裏書南庇第一間立床子為穩座又大臣家大寮食所敷穩座菅圓座敷階間
「發願漢音座主言讀問者登高座誦義」
博士經武のたとひ書讀終紀毛詩尚書論語
周易左傳とよ小書をりてさらけり
もらて和論のまふすむ人又一人御
もあふあはれぬ法とあふせおまふなふ
後醍醐一人

予被賜てつゝ為人こゝろく悔ん心法
法を奉りたるは釋とん乃昨こり
成なりぐしはたにくさげりろく着
中ふしと也二法釋とん又武天皇大寶
元二年二月ふともれ終紀乃王制小菜
以釋幣法釋とん先師と終とんあふこれ
○孔子通紀云明帝諸孔子宅御講堂命皇太子諸王説經靈帝詔置鴻都門學
畫先聖及七十二弟子像
法宅小菜して仲尼のひり七十三
弟子と稱とみなりは先聖と稱
史記卷之六十七仲尼弟子列傳第七
孔子清いひ先師とは教回といふなり

○學令集解云開元令
 云釋奠為中祀州縣釋
 奠亦準小祀例神護景
 雲二年七月廿日官符
 云應改孔宣父為文
 宣王事右得式部省解
 偶大學寮解備助教正
 六位上膳臣大丘謀備
 天平勝寶四年大丘隨
 使入唐問先聖之遺風
 膠庠之餘烈國子監有
 西門題曰文宣王廟時
 國子學生程覽告大丘
 曰今主上大丘備範追
 改為王鳳德之徵于今
 至矣然惟舊典猶稱前
 且誠秉崇德之情失致
 敬之理大丘庸聞斯斯
 行請敢陳管見以請明
 斷者勅号文宣王今依

所謀謹請省裁者察解
 狀理須必然方行其啟
 合旌厥德後天奉天時
 蓋謂世乎仍顯改由請
 官裁者官議奏聞奉勅
 依奏
 ○續日本紀廿九三毛此
 事
 異國引渡了 ○江次第
 裏書或說曰吉備大臣
 入唐持弘文館之書像
 來朝安置大宰府學業
 院大臣又命百濟畫師
 奉圖彼本置大學寮

一國公と先聖といふ孔子は先師と成り
 孝と誠唐太宗貞觀二年小改く先聖先
 師といふ孔子教回とすといふ又神後景雲
 二年孔宣父と改く文宣王とすといふ一弘
 仁格ふといふ今大學寮小祀に先奉る孔子
 十哲の教の異國より渡て我朝累代乃
 物として傳ふるなりと傳へ

聖春日祭

上申日

是も二月十一日小初りの先未の日使に
 川を流る中少將流とせ萬賀流に流る
 こと一府官人櫻橋長く舞人法住僧
 法心無名門の主人小ありて車乃建と
 奏と舞人も好く舞いといふと花人のて
 海よりうらき一色より花小高日乃あり
 法心因侍ひしと花人船車奉るといふ舞
 所より小なりといふと清和天皇自
 五十六代
 觀元年十一月九日世宗といふと
 春日回前大御神といふ奉るといふ一法
 殿の武甕槌命才二河殿の秋重命才
 三河殿の三津見命才四河殿の

○春日秘記 同二年十
一月九日 申 三笠山頂
官柱立三所御座四年
正月十二日 寅 三笠山
下津磐根南向官柱立
御遷官在之其時第四
御殿奉祝副也長者左
大臣正一位藤原朝臣
永手御時也

姫大神タカハタ 姫大神タカハタ 栲幡
千千姫命也
○神名秘書云天照大
神相殿之姫神栲幡千
姫命於春日者第四神
殿坐也

志神カミ 是之神護景雲元年正月廿一日武
いほら命常陸の國麻波のり河をこし

取つて小おほし河系河を麻波とて栲

本枝と河しらより河系河を伊賀の

國なづりた郡ふつ河系河を河系とて

中流の連時風系河といふ人をなり十月

七日小おほし河を山は流せり同くき二

年正月九日三笠山は流せりこれ終り

て見屋根命いひまらりて姫大神は

河りておほし河とて河系河

是は命命の下の三笠國を取らり

流して流す天照屋根命の河内國平

つら河のりて姫大神の伊賀國のり

河系河を河系河といひて河系河

は命命の河系河を河系河といひて

トき河系河の河系河を河系河といひて

河系河の河系河を河系河といひて

河系河の河系河を河系河といひて

河系河の河系河を河系河といひて

河系河の河系河を河系河といひて

河系河の河系河を河系河といひて

○今集解釋云伊謝川
社祭大神氏宗定而祭
不宗者不祭即大神族
類之神也

○大和國添上郡率川
坐大神御子神社三座
率川阿波神社
今按率川坐大神御子神
率川阿波神
皆率川社イハシト一
社率川一社三枝心得
ハキカ

此神宮内省ニシテ古
事談第五園韓神社者
本即坐大内跡而遷都
之時造官之使等可移
他所云于時詔宣云猶
坐此處奉護帝室仍坐
宮内省内云云
○西宮記西宮左大臣
高期公作
○北山抄四糸大納言
公任作
園神不詳
韓神大牟神之子也見
舊事紀第四古事記二
卷

まはけ月一満乃祭平思けまつりるは是と
し乃申け日使と殺遣ちし孫記まひふ
たや

里一 自春日社西二十三町率川明神也
率川祭 上酉日

ひ祭の春日祭乃あく新日たこ初るる神祇
今小のまはけ三枝祭と同しるをは置
ててあはけ藤氏南家れはけり率川
徳社の者大は是公け建まといりる
き事ハキカ三枝祭れ下りのまはけ

里三 中丑日云云枝有二三
丑者用上丑
園祭 韓神祭 上丑日

け二神多文内省り満一まはけ延唐遷
都法時造文使他下小う法しるまはけ
まはけしる小うは下小まはけ神門と海
ありたてまはけんと滝宮まはけ延唐遷
園神一庭韓神二庭とのまはけ祭祭を
年小二まはけ二月と十月と也上卯毎内侍
しる儀式をまはけあき事冬西文北山江
次初居うれ書ふの給しる

里四 大原野祭 上卯日

是と年小二まはけなりけ神社の辰まはけ海

○名目抄云行啓謹着
宮皇一等御出也

いし給路りんと先皇日の本社に候さふ
いし都らうまふいし候しを候
い大原野に候御ましと一軍法に
仁壽元年二月のりしと先皇のりし
を清の使を春自よりかきと一御
辨内侍をとじし

太神宮以下一

四五 祈年祭 四日

○延喜式第一四時祭
上祈年祭神二千一百
三十二座 國司祭祈
年神二千三百九十五
座

是名太神文に下三千一百廿二座の神を
海流に給しとし其取れたしとありしと家
養の國よりたのく幣を候とありしと家

祈年

○詩經雲漢篇祈年
夙集註祈年孟春祈穀
于上帝孟冬祈來年于
天宗是也

白猪白鷄 ○式云御歳
杜亦与猪白鷄各一

○西宮勸物云左右京
進二只鷄近江進白猪

國も七年こいさすはつ是候に御
祈年を豊ととしとありしと
乃しと祈年を豊ととしとありしと
てふの徳園のりしとありしとありしと
乃しと白猪白鷄をりしとありしとありしと
四年二月ふりしとありしとありしとありしと
手徳祭月次南度新嘗祭に候しとありしとありしと
國體大事とありしとありしとありしと

四十六 祈年 十一日

上御辨の納言外紀史にありしとありしとありしと

了ておこし人々を事なり六位以下乃無
能あり相と名くびく式や其れ二省の
率あくまの進家法の上乃それとめ
皆く美量容儀とみる心く御家并小宮
程座小つとく儀式を御儀とて
下乃冠りさく大はを藤花紙細書福也
冬儀六位とれ法より花より北冬儀以下
時法をさくさくし御事冬定考は
小志別ゆか

四七 小野御忌日 女白

八月十日

吉祥院三八講了〇八
講料所加賀國了管家
長者記云加賀國富墓
庄号柴山庄 件庄者自
古無主荒廢之地也雖
然依在仁者樂山之因
緣申請官旨令施八神
領永爲法華八講料所
云云文曆二年八月廿
三日 大學頭前長詣守

廿二社
〇廿二社次第五定廿
二社由來事
村上天白康保三年森
雨經月八月廿一日被
奉官幣於十六社
伊勢 石清水 賀茂
下 松毛 平野 稻荷
春日 大原野 大神

二月乃女白は大海大自在を神れ
がら給一神日也夢れ法げ阿利多天仁
手より吉祥院して八講あり管家付とも
かゝあく是を行ふ

甲 初年穀奉幣

是冬二月七月了るびありし日して
亦廿二社也 伊勢 石清水 賀茂下上 松毛
平野 狹荷 春日 大原野 大神 石上 大和
廣瀬 龍田 任吉 日吉 梅文 吉田 廣田
祇園 小野 丹生 貴布祢これより八講は後

石上 大和 廣瀬
龍田 住吉 丹生

貴布祿

一條院正曆二年炎旱

送百萬物變至六月廿

四日加吉田廣田北野

三社被奉官幣於十九

社吉田廣田北野次第

事為住吉之次丹生之

上由宣下

同五年二月十七日祈

年穀之日加梅宮被奉

官幣於廿社梅宮事可

為住吉之次吉田之上

由宣下

長德二年二月廿五日

被奉臨時官幣之日加

祇園為廿一社

後朱雀院長曆三年八

月十八日被奉官幣之

日加日吉社為廿一社

日吉事以爲住吉之次

梅宮之上由宣下

一代一度仁王會見

江次第十五

冬中納言賀茂平野松尾春日為宰相在

外之部四位少進乃つゝひなり力一社との

宣命あり伊勢を花田久馬重茂松尾の

振其外冬分黃方より少少く文武を望

望し正月法社より幣遣奉る御大寺より奉

奉る年穀と祈羅んたぬ十一社小奉幣

ありとみくあり

甲九 源時仁王會

春日と云くびくつりて武を二月なり大花

殿紫宸殿清涼殿なりては事あり仁王後

國般若院法海寺一尊しんり初家法

御祈時為なり秋の望六子八月

仁王會あり聖武天皇御葬六子六月

二年なり藤原六子七道よりて初御

まゝ一代一度姓大仁王會とて事あり

も也終の代り一度りこころあり事な

五平 源時仁王會

是を奉公於芳よりて難長百宿より福を

給ふ事なり一上陣より座小つゞく佐藤

物文と刀のら大辨同録成り其外より
事なり文武天皇大嘗會の八月八日
位以下之御大嘗會よりりて録之
也之御事有る日と云々ひひ
もももも三月なり

五十一 季御讀經 内裏 日本紀二十一

二月八月小大般若經成りて後
四月月事より二月日之御茶
茶と給ふ事より平元之四月八日
より御事有る日と云々ひひ

○江次第裏書云季御
讀經春秋一季請百僧
於南殿讀大般若經

○江次第云上古被奉
御燈之時以觀北山靈
巖寺邊供之貫平初月
林寺後圓
寺尋東流水於其上行
之

色いりりりり

三月

三御燈

二日

是日天子法水計り地之奉り給ふなり

乃山雲岩寺拾芥下本云妙見寺在王城四方又号靈巖寺歟

今西賀院有故迹七月十六日燒舟形延喜式第三十六
主殿寮式諸寺半料油靈巖寺料月別三升小月減一合

北辰菩薩院羅尼經云我北辰菩薩名曰妙見今欲說神呪權護兩國土所作甚奇持故

峯小火とりて小辰小法と云々

小沙下世事今御燈禁秘抄近代由後也自二月精進不供魚肉僧尼服等同他神事御禮之後供魚球俾人參

由御夜也孫廂ハシ

由御夜也孫廂ハシ
北向御座是二枚
半額間南燈爐ノ
繩ヲ又ス出御ナリ
贈物モ主參五位藏人
役送ス配膳人形ヲモ散米
モ心得ル也宮主長橋
モトニ跪テ御夜奉配膳

公事抄源中

十

○李太白春夜宴桃李園亭云飛羽觴而醉月

○漢書外戚傳孝武衛皇后傳云帝祓霸上還

孟康曰祓除也於霸水上自祓除今三月上巳

祓禊也師古曰祓音廢

櫻音系

○幽王

○十節錄云二月三日

草餅何哉周幽王淫亂

羣臣愁苦于時設河上

曲水宴或人作草餅奉

幽王王嘗其味為美也

王云是餅珍物也可獻

宗廟周世大治遂致太

平後入相傳作草餅三

月三日進于祖靈草餅

之興從此始

○今按此十節錄故事

非也幽王周世之惡王

三周世之衰之幽王

三始三草餅幽王三始三

非三草餅八草餅草餅

也本草陳藏器曰荆楚

歲時記云二月三日取

鼠麴汁密和為粉謂之

龍舌料以壓特氣日本

三鼠麴草ヲハコトヤト云母

子之也無マニト云祝儀

ヲ表スルニ

河少待と化とされ重ととののころ也

相觸法慈とをわとけ事かをく

又三已法のくく人との東流物あり

くくくくくくくくくくくくくくくく

かきり又草餅を二月三日より用と事

周幽王の事なりなりなりなりなり

えり

五十四

藥師寺寂勝會 七日

淳和天皇壬午号

長七年のり藥師ちて毎々七日寂勝

と法と法と法と法と法と法と法と法と

五十五

石清水除時祭 申午日 江次第六

二月三日此の奉約は為人使舞人

くくくくくくくくくくくくくくくく

くくくくくくくくくくくくくくくく

御りくくくくくくくくくくくくくく

くくくくくくくくくくくくくくくく

下小作と吹小年中の事乃隣子法と

くくくくくくくくくくくくくくくく

くくくくくくくくくくくくくくくく

竹臺下ニ竹枝ヲ十訓抄云一条院御位時實方中將奈法樂三進參リテ

カサシ花ヲ給ハサリ九三依テ舞人カサシテハハハ竹臺下ニミテ樂竹枝ヲ折テサ

南祭ハ石清水臨時祭也
江次第賀茂臨時祭條
云石清水準之但無御
前儀

神祇令云春季鎮華
祭義解謂大神狹井一
祭也
狹井者大神之鹿御靈
也

丁未二月三日一の毎年の事一付成約
なり次付日^カ立れ儀も南祭の沖あり
使し事見江次第
免さびら湯殿りて勸雪返く^カに
ゆふ

手六 儀義字

是冬^フ右^カ神^カ棟^カ并^カ乃^カ二祭^カとい^カ中^カと^カ神^カ祇
令^カりの^カ也^カの^カ差^カ花^カ乃^カ舞^カい^カ終^カ儀^カ神
か^カ敷^カして^カ人^カと^カか^カゆ^カは^カな^カる^カな^カる^カ終^カを
あ^カの^カり^カん^カあ^カり^カい^カ祭^カを^カま^カご^カう^カや^カ神^カ祇
官^カと^カて^カあ^カり^カれ

辛七 京宮除日

是は三月三日一の先り^カに^カお^カり^カた^カる^カ
事^カか^カも^カも^カ今^カ秋^カ神^カ除^カ日^カと^カて^カい^カめ^カる^カ
冬^カも^カが^カい^カあ^カり^カの^カ京^カは^カ何^カも^カ神^カ司^カと^カい^カ
舞^カい^カな^カる^カ京^カ宮^カは^カい^カる^カ概^カも^カい^カし
法^カ道^カ子^カ大^カう^カの^カ春^カ法^カ除^カ日^カに^カお^カり^カト^カ三^カ省^カの
奏^カり^カに^カあ^カり^カの^カ免^カて^カあ^カり^カ一^カ式^カの^カり^カ
二^カ式^カと^カい^カの^カい^カの^カ法^カと^カい^カ一^カ式^カ
一^カ法^カ秋^カ乃^カ除^カ日^カと^カい^カめ^カる^カ一^カは^カま^カり^カ
ゆ^カふ^カ也^カ

壬午

東大寺授戒

延喜式凡授戒者每年三月十日舉行
之月内令軍其應行事之省寮綱所三司
交名當月五日進官

是日三月十日吉日擇
行也也拾芥抄り
鑑真和尚事續日本紀
元亨釋書宋高僧傳東
征傳等見之
東征傳云於盧舍那殿
前立戒壇天皇初登壇
受菩薩戒次皇石皇太
子亦登壇受戒率沙弥
蓋修等四百四十餘人
受戒又舊大僧靈福賢
璟志忠善順道縁平徳
忍基善謝行潜行忍等
二十餘僧捨舊戒重受
和上所授之戒後於大
佛殿西別作戒壇院即
移天皇受戒壇土築
之

四月

更衣

一日

戒院

中吉日也江次第六齋院
御襖點地上云々

清涼殿御帳間了御
帳四面有儿帳帷夏生
以胡粉畫華雀公朽木
形見建曆御記
トト女官飾鉢トト六
更衣トトトトトトトト
シライシレモカサ子之候
又ニトトトトトトトト
コキ引キ也

三つねに... 也... 藤為裳小之藤
胡曾抄云薄色 經紫 韓白

卒 孟夏旬 同日

是日天子夏冬法季乃あくらた旬は一
め小治下り御酒... 己政ときあ一
... 義なりた... 旬は...
... 南殿... 旬は...
... 旬は...
... 旬は...

出居次將 ○裏書云出
居次將旬次將出居必
左大將勤仕出自本陣
之故云云
○江次第云御里内之
時依無所於陣居鯉仍
辨心納言不著顯座仍
四獻 不召侍從事留三
献

冬至小あ... 海年... 旬は...
旬と尸夏... 旬は...
孟夏... 旬は...
旬と尸... 旬は...
... 旬は...
... 旬は...
... 旬は...
... 旬は...
... 旬は...

平座より約ゆる

六十一 貢水

同日

平座前一日可停節會
由被仰下當日上海著
伏座令藏人奉可給社
臣酒由見江次第

平座の同四月一日より九月月盡まで、是より
てまつら奉りて、利をてつ極り下り
すゆりぬ

六十二 大神祭 上卯日

是のころ卯日小祈りる事一卯日
三よきは仲のよあらへ一先母の使
まのち原姓へ一あれ祭をいど
法日使の具ある事一卯日乃使

○舊事紀四

大己貴神乘天羽車大
驚而貢妻妾而下行於
新津縣取大陶祇女子
活玉依姬爲妻

夕小まのちうあをらふ神とほ大に極り
祇なり大物主乃神乃御事なり二極
とす存極い一へ法大物主神御
玉依姫とわふ女のまへへ志法びりか
り皆給まら河志家人とてあらしきそ
の女懐姫小のひく父母うこひあやせ
非人の常小き命一若くとい女小同多れ
はこ法日以人れ一あらあらる由家乃居り
らあらしき一あらしき一ゆりきと
あらしき父母まをまをんとあらしき

一ツリテ ○舊事紀續
麻作線云云

第淳山吉野山。此吉
野山天和吉野山非
後世第淳第ヲヨレト讀
淳ヲイ讀アヤリテ舊
事紀經第淳山ト云フ
本ハ八吉野山書多
ソレ又後人經第淳山
八吉野山ト連書タリ
第淳和泉國ニ宿玉
依姬ハ第淳人也
ノイテワケレニワケリ
○舊事紀見其線遺又
有三紫
三輪山ト申在 ○三紫
靈異ニヨリテ見室山ヲ
三輪ト云ト也

布とていし紙魚よりりて針と付く如
くしていしくひ度り法神人れき海
もせんいさここれ針とてきてきし衣
のきせふはけしとあしあら女度
ししへのまきよしとてはつらあし
けしけしと銘の穴よりとてりく第
淳山吉野山とて見室山よきちり
きりけ耐えしとて大物主神は志
るしあしとてれりりりりりりりり
りりりりりりりりりりりりりりり
りりりりりりりりりりりりりりり

稲荷 ○神名帳曰山城
國紀伊郡稲荷神社三
座
或説云保食神稚産靈
神大己貴命

和銅
○元明天皇羊號

此事舊事本記小見及信一處う小れ
ほへゆらふれくもみかたれゆら事
なれば今更ならやうなれとりり
かたくて一筆あしりゆらとてなり
此系貞親のゆらりりりりりりりり
三三 編苜紫 旬日
一原社社建立の縁記又まうりれ鑑觸な
と本見しりりりりりりりりりりり
或記五年二月十一日戊初現伊奈利山三箇峯
説公和銅手仲ふしりりりりりりり
光後朝臣歌云キサキヤ今日初午しと稲荷杉モツ葉モナレ枝

東寺

凡八卷果實撰

○東寶記第一或記云

桓武天皇御宇延曆年中於山城國被立平安京之時而本者山背國也山背号建立東西兩寺於羅城門之左右寺号左大寺西号右大寺羅城門之左元在山城國分寺以其跡建立大伽藍而号左大寺云云

東寺門前其橋にひつる老翁
あり給きりと東寺門松守小勸修寺
されたりと説けりは其の如く
よは藤原若くともつとてや
山科系
山己日
山城國三丁治郡勸修寺
舊事本紀 日本武尊見稚武王官道君祖也
延暦心と法祥結とは遠直ありと目観

桓武天皇

平野系

江次第六

清中天皇

○江次第六外記進見
參文上卿見畢召近衛
府將監給之云云大藏
省積祿

○又云使殿上五位依
廻奉仕之

○又云春各五人御馬
左右各

○又云各五人御馬
左右各

○又云各五人御馬
左右各

○又云各五人御馬
左右各

○又云各五人御馬
左右各

○又云各五人御馬
左右各

○又云各五人御馬
左右各

○又云各五人御馬
左右各

○又云各五人御馬
左右各

○又云各五人御馬
左右各

しよと清乃將監しつひつるか系と
いりまひりて奉と法祥の系ありは
殿と人使と法と清乃清法祥人あり
好御禰あり御幣なりと雲茂の法祥
系なりと云々乃法祥の系ありは
月十日よりと云々乃法祥の系ありは
権佐藤原惟成なりと云々乃法祥の系ありは
御殿の源氏才と云々乃法祥の系ありは
大江氏と云々乃法祥の系ありは
すゝたぬ

六十六

松尾宗

詳見江次第六

同日

今案亂世以來上酉日也神事延引之故歟

大山咋神御事也。舊

事本紀第四大年神娶天知迦流美豆姫爲妻庄大山咋神此神者坐近淡海比叡山亦坐葛野郡松尾用鳴鏑神者也

杜本。今トモト云小

社。此歟不詳

當麻。開化天皇皇子

參坐王當麻君等祖見

事。用明天皇皇子麻

留子皇子當麻公之先也見日本紀

當宗社今國府總社

○世俗淺深祕抄下卷

云寬平法皇御外祖母

氏神在河內國所謂當

宗社也仍自仁和五年

被察之或說曰實御母

儀中野親王女姪子女

三五云

當宗氏新撰姓氏錄當

宗出後漢獻帝

四世孫山陽公之後也

○神名帳山世國葛野

郡梅官坐神四社

酒解神 大山祇神

大若子 瓊々苜尊

小若子 彦火 出見尊

酒解子 木花開耶姬

○陽成天皇

此宗も貞觀年中少くはゆる大寧元
小奈の都理といふ人々もくはゆる神座を建
立しつゝとるや大山咋神此神事なり此般
山乃神と因神とて申すは

六十七

松平宗

同日

河内國一社と神社なり平日使ふ所
和久年宵小奈といふは

六十八

當麻宗

同日

葛下郡當麻都比古社二座此社與當麻山口神社
大和國一社と神社なり平日使ふ所

六十九

當宗宗

と酉日

是の河内國はゆる神社なり平日使ふ所
杜平當宗の社なり此般獨り使ふ社乃

系神と云ふ下向と字多御門乃沙外社
又の當宗氏より云ふは仁和及び宵月由

り系神といふは仁和及び宵月由

七十

梅文宗

同日

系和乃比のり此宗のり一はゆる系延の
毎年の事なり成るなりそれなりあはり
つゝ時も又とつゝもつゝもつゝもつゝも

元慶三年四月二日停
梅宮祭同八年四月七
日光孝天皇仁和元年
四月七日又始祭三代
實錄見一奇

公事抄源中

仁明天皇乃御母篤太后乃御神
承和年中小初御門より祭と奉修
橋氏乃祀る也一是定といひく橋家
人の管領より社を御也柞也是定れ
法人乃家よりつり一奉修橋氏の
て後正月五日に叙佐小氏乃事と後
人乃事よりつりて寛和の比中園
と今乃侍一時宮よりつりつり
乃事乃侍一也中園白栗田乃事
當れ宮白此二人の母の橋津也藤原中
道隆
道長

ひ一人乃侍も中園の宮の中納言橋津清
法也中園白栗田は御母也今乃中納言
りて是定乃藤氏乃家小初御一乃事也

是定乃氏爵事乃定行乃心也是氏也其子細乃西宮記云學館院
此見一是定乃首氏定乃書乃事是定乃事也後漢書李雲傳章懷太子
註是與氏古字通耳是定乃申請并勅許事玉葉記云
請以右大臣擬定行氏爵事狀

右氏人之中無公卿之時依氏族申請被下宣旨令定行氏爵事者例也爰檢
舊風爲中納言橋津清卿女嚴子之外流依非無詔穆請申請之處已以在
事辭退者以右大臣可令定行氏爵事狀所請如社仍執事狀請處分
安元三年四月十三日

- 散位從五位下橋朝臣
- 散位從五位下橋朝臣政光
- 散位從五位下橋朝臣親長
- 散位從五位下橋朝臣以實
- 散位從五位下橋朝臣清成
- 散位從五位下橋朝臣清定

公事抄源中

廣瀨 ○廣瀨社大和國廣瀨郡下今阿谷郡神是也

○神名帳曰大和國廣瀨郡廣瀨坐宇加賣命神社

龍田 ○神名帳曰大和國平群郡龍田坐天御柱國御柱神社二座

龍田比古龍田比女神社二座

○大忌風神祭 ○神祇

今大忌祭風神祭

神代卷 神代卷上伊弉諾尊與伊弉册尊共生大八洲國然後伊弉

尊曰我所生之國唯有利朝霧而熏滿之哉乃以櫛之氣化為神號曰級長尾邊命亦曰級長津彥命是風神也

○莊子齊物論云大塊噫氣其名為風林希逸口義大塊天地也天地之間因何有風亦猶人之噫氣也

階 階 擬議也誰々加階々々々義々々也

前筑前守正五位下橋朝臣以政
正二位大納言源朝臣定房宣奉 勅宣冷件大臣定行彼兵衛事者
同羊同月廿三日 大外記兼越中權守清原真人頼業
此事參議橋恒平朝臣卒以後云々

度濃於田祭 四日

是兩社大和國よりあり祭れ日ハ廢祭也
二度約りて使ハあり日ハ所大忌風神社
祭とつて是より風あり雖とのがささく
年穀乃豊る事と約りささくわさ
と皇學四月小風神とささくさ野小志
けり大忌乃神と度濃川田小志つて
り今紀小志より神代れ者より伊弉諾

伊弉册尊の朝霧と吹りて一とささく
氣化して神と成る事と風神と
一とささくさ野小志
風とつてささくさ野小志

擬階奏 七日

これ等二月乃外見乃時成選擬冊と二
者らりてまゝささくさ野小志
後也列見延門乃時ハ選とつてささくさ野小志
事ハそつて擬冊とつて選とつてささくさ野小志
へつて選とつてささくさ野小志

公事根原中

○若當神事停止云

五色水高僧傳云四月八日浴佛以都梁香爲青色水鬱金香爲赤色水丘隆香爲白色水附子香爲黃色水安息香爲黑色水以灌佛頂

神事小あつた日ハ約ハ里ハ灌佛有候云
九日ハ神神事云々トナリテ神宮乃
母屋乃神宮人ト云レクハ神宮乃
トテそれ約ハ山ノト云々ト云レ
シレ多クハ云々ト云レテ
瀧ト云レクハ云々ト云レテ
又札ト云レクハ云々ト云レテ
云々ト云レテ殿ノト云レテ
房乃布捲も云々ト云レテ

中納言四帖參議三

帖也各以紙四枚裏
各二枚重之以白木
右爲表裏上
當付之上下以細帖
紙閉結閉之本左頭低
注其人小野宮之流者
納言以上只注官名參
議以下書各二字也自
餘人者大臣不注各納
言以下皆注各
裏書云長保五年改
錢用紙宣平八年布施
法親王大臣五百文大
納言四百文中納言三
百文參議三條二百文
四位百五十文五位百
文六位七十文長保五
年以後紙一位八帖
二三位四帖四五位二

付く風儀ナト云レテ衣着乃云々ト云レテ
皇盤下ノリハ云々ト云レテ人ト云レテ殿
乃皇盤上ノ人小あつくと云レテわづら
あつて云レテ神宮乃云々ト云レテ
羊中行事大幣云佛布施ハ舟裏トナツケテ
公卿以下次第持參シ佛前ニテ事ナリ
紙ツミ白木枝ツケテ

神宮乃札小あつくと云レテ
神宮乃札小あつくと云レテ
乃云々ト云レテ神宮乃
乃云々ト云レテ神宮乃
乃云々ト云レテ神宮乃
乃云々ト云レテ神宮乃
乃云々ト云レテ神宮乃
乃云々ト云レテ神宮乃
乃云々ト云レテ神宮乃

帖六位一帖

○西域記第五劫比羅
伐窣堵國舊曰迦羅衛
國訛也中印度境
次東窣堵波無憂王所
建二龍浴太子處也昔
薩生已不扶而行於四
方各七步而自言曰天
上天下唯我獨尊今茲
而往生分已盡隨足所
踏出大道華二龍踊出
住虛空中而各吐水一
令一暖以浴太子

○神宮雜例集嘉應二
年解云於神御衣勤者
掛與天照坐皇大神御
坐天原之時以神部等
遠祖天御神命為司以
八千千姬為織女奉織
之間御垂迹之後千公
其勤誠以嚴重無變也
敷和衣ヲ敷和衣上足
本云義解三麻績連等
績麻以織敷和衣云
敷和者宇都波多也

公事根原

公御次方一ノ事ミク勤ト一ノ膳
一ノ物ミク勤ト一ノ事ミク勤ト一ノ膳
後行佛ノ守神ノ功績ノ事アリク此
佛生舎は推古天皇ノ御一ノ事
釋迦如來ノ俱舍羅城ノ事
大方等大集月藏經卷第五以精進故居兜率天宮觀其特節捨彼宮殿正知
了了而八母胎以精進故於藍毘尼林從母石脇安隱而出以精進故行七步
已震動大地及著山海以精進故受彼難陀及婆難陀龍王兄弟淋水浴
於時三龍下ク其トクニシテ釋尊一ノ河
海等奉一ノ事ミク勤ト一ノ事

七十四 伊勢神祇祭 十四日

是ノ神祇令小ノ事ミク勤ト一ノ事

一ノ神祇部祭一ノ事ミク勤ト一ノ事
此系トシテ神祇ト行ル又麻績乃連トシテ
氏人麻績トシテ敷和衣ヲ織ク神祇小
事ミク勤ト一ノ事

七十五 日吉祭 中申日

一ノ神祇部祭一ノ事ミク勤ト一ノ事
後朱雀
一ノ事ミク勤ト一ノ事

七十六 賀茂園祭 同日

公事根原

欽明天皇御宇一

○袖中抄云志貴島宮御宇天皇之御世天下舉國風吹雨降亦時勅卜部伊吉若日子令卜乃賀茂神崇也推四月吉且馬繫鈴人蒙猪影而馳馬以為祭祀因之五穀成就天下豊平祭曰乘馬始於此

和銅詔アリテ

○續日本紀元明天皇和銅四年四月乙未詔賀茂神祭日自今以後國司每主親臨檢察焉

三十代

欽明天皇の御宇四月小吉日と云くひく内
河津海に下見あり又和銅二年河津
山城の國司是と檢索と云くみく
と云く國司の如く是年祭行ふべき
酒のり心申つり冬と家々の使と云
され走馬と馳る家ありひくくま也

壬午 國司賀茂祭 同日

初度なる日次と云くひて此事を云録
二年九月廿六日拾改古長治法家と讀ん事
是は拾國司人志賀茂祭乃くひく

國融院

伊尹公謚号

是事なり主人を奉車して地下殿とれ
前庭あり白砂乃沖幣神宮唐礎等
此物と云くけと云く世琴持菅笠源
常といふ相と云くく上と云く新と云く
河津社ありて神降あり養植と経臣持
河津は是法冠りく東極球子と云
の舞ありと云

壬午 賀茂祭 中酒日 ○四月酉二ツ中酉
二ツ下酉用

此一はの先と云陣小と云く六府と云

西宮記賀茂祭
警固衛府公卿卷櫻柳
參内卷之非參著綵帶
議身里亭卷之著綵帶
劔弓箭蓋蔽以候陣及
殿著赤地廳者可觀之
衛舍人著褐半臂等候軍

公事根原

奉社覽

續草薺集宗雅

ノクミル神ト君トノモロカ
モロコニカケテニエケリ
モエ出^ニ春^ニ二葉^其三
夏モシケテ又ア^ク七草哉

二ノ神祭也

○二字^下社字^ア奉^敷
御祖^ノ神名帳曰山城
國愛宕郡賀茂御祖神
社二座

或神書曰健^健律之身命
伊賀古屋姬命

玉依姫^ヲ河合社也

河合^ノカハシトヨム又タ^ノスト
モヨム鳥居西向五タラ

タス木林上至此仕^林也
御祖河合^ノ與^テ大社也

此下賀茂也今俗此^々
ス^云訛也下賀茂鴨^字

書後世^ノ也

云^ミ小川^ノ無名抄云石
川瀬見小川賀茂河實
名也

○山城國風土記云賀
茂建角身命云葛野河
與賀茂河所會至坐^廻
見賀茂川而言雖狹小

然石川清川在仍名曰
石川瀬見小川

○祭^ヲ神生上^亨別雷^命
生^ニス日也^ト實^ハ申日

カ神生^ニ西^ノ月神^生ヲ
祝^フ儀^{ナシ}

俊成歌

ヨ^シカ^タ今日^ノ自^言祭^ニモ^モ
ノ^コハ^シノ^コ方^ナリ^五社^百首

別雷命是也○神名帳

曰山城國愛宕郡賀茂

別雷神社亦名若雷

今日

今日

今日

今日

今日

今日

今日

今日

今日

今日

今日

今日

今日

今日

今日

公事根原中

三十一

一々登園のりー汝作と為同の使にと

傍の中少おつとし昔夢はけけり

子人くわあひ桂乃髪とく海也賀

廣松尾志社司ま志日ーりあうんき

あーへーくまらふ秋明天皇に御宇

つと法紫いーい海ら下鴨志津紀

賀茂別雷とけ神祭をりて法伊紀

玉依姫と下しと賀茂建角身命をいひしめ

也あつ世をれ小川に河らふあそひを

あよ川よら丹塗ら夫ーとらあうんき

玉依姫と法夫とらりて我家乃屋縁よこ

いー母とそれららーく経たくつら

男子とらし細きとも父とら進しもあうんき

葛野河賀茂河上會所ハ主殿科也上鳥羽小枝橋西

つとあそひつららる酒もりてせい

ゆと見ふ登とらりてせをんらうあうんき

とらーへちれいらごともさうはふよは鹿

空ーうけく家れ屋縁神婚し御かり

て我ハ夫婦の沖子なりとてとととと

てぞのやりやうか別雷神命是なり

い海も丹塗ら夫の松尾れたの神と後の

公事根原中

三十一

大祀中祀小祀 ○神祇
令云一月齋爲大祀三
日齋爲中祀一日齋爲
小祀

冷泉院 三石神也 ○古
事記第五中山社嚴神
者冷泉院中島令祀大
神給云其後事外放光
後冷泉院御時歟託宣
云門前車馬多時出入
不輒給此所一向欲住
云依之今去移他所給云

○江次策裏書至吉田
祭永延元年始之元有
山陰中納言一家所祭
也

後冷泉院
紀小紀より奉あり一月廿神事なるは
紀といふ今此等祭なりと云三日かゝるは中
神事なる小紀よりと松尾平野以下
依結ふ祭なり給也

壬午 中山祭 辰日

永承五年六月十六日神祇所建立一園
後冷泉院
六年十一月八日より三位乃神位と云
是より此是冷泉院より石神位なり

後冷泉院天喜元年四月より
官幣あり

壬午 吉田祭 申子日 江次第六

この法社の中納言云山陰御自領乃比平建
立して一條院永延元年より
官幣となりてより給給ふ春日社と同
神に宗元乃東社時の春日社長長元家
時の大原野いまた平安城の時の吉田社也
と如帝都らるに所を志りて神門とま
利あり給ふなり是は神宮の園白志

法成寺と若田社と須あつらひひ一車を
奥福ちと春日社とに切りひし坊屋を
あつらひひし坊屋を

十一 駒亭

廿八日

こ終の四月小竹ち車なる八月末に名を
うとちんと心いれ利天皇武徳殿
寺とまのし下麻子小竹く左右に御監
沖馬法養ととる馬以存小よりし御
と引渡と白る忍事會れし一しを清
若田社射を南よりしし御射射た文を

御監

御監馬監牧之意

奏と左右大竹をを養也を清也持下
富長山と小人の竹を養と養す右を清
細藤利竹たととるしは雅樂寮苑芳源
的形法奏と此物亭の兼月竹騎射馬射
手人竹ととま今日御清也と御也
竹の貞観の法よりしととるし小月
法成寺廿七日より延長中を八月三日より
御引ありとみした利

八十一

新日長宗

四日

二條院年号

永曆元年十月十六日白門院日長宗

庚申

新日長宗今智積院北隣

豊國妙法院寺法住
手殿也

東南也

諸神記 外記番記

五月

午酉 献葛蒲 三日

六府あやりの輿と南殿乃階は東西より
まはつ乃敷とわたりておなりと
四日あさくれおの庭より是と
察西と小志うぬく天年十九年五月
つ派ありて百位徳人、春葛蒲乃鬘と
かたうかりと母者い文叶小入
はとと、おれゆる弘仁式も葛蒲も
うと三りと早と小南殿乃前小と

八五 五日節會

天皇武徳殿一お沖なりて宴會と
形は郡臣小酒と給さなり四辨
元日七日十六日豊明
四節よ同くはれあやれと
日徳うづと徳と典藥寮あや
御案とそま何を郡臣小藥玉と
八色のいんげんもむとりのくま
鬼をともさるるや文のや
跨給乃事あり大將給はれ奏と
左衣を清馬小家と遊と

アヤムシ。延喜式左
近衛府式凡五月五日
藥玉科葛蒲艾摠盛雜
花十棒盛後三日平日
中内侍司別設南殿前
諸府
准此
○水葛蒲 唐テ端午
葛蒲ヲ酒漬ノ飲石葛
蒲

○榮卷河海松クス之續
命續靈絲綵絲索十
トカケリ何と藥玉體也
五月五日絲所藥玉ヲ
供え去手ヲ菊花菘更ヲ
疑シテ仰腰重柱結付也
醫用消息云今朝自或
所給藥玉一流作以百
葉之花貫以五色之續
續草虫形其花葉芳艷
之美有興有感古人云

懸命縷則益人命云

考此物之謂歟

五色之絲一曰荆楚歲時

記云以五絲絲繫臂名

曰辟兵令人不病瘟

○事物紀原九端午端
初也

○珊瑚鈎詩話二端五
之号同於重九後世以

五字爲午則誤矣

高辛氏惡子一曰本

據夕方云

屈原力泪羅一曰此

說云

○事物紀原云糶一名

角黍風土記曰以菰葉

裹粘米以栗棗灰汁煮

之令熟節日啖取陰陽

尚包裹之象一曰因屈

原也齊諧記曰原以五

月五日投泪羅楚人哀

之每至此日以筒貯米

祭今市俗置米於新竹

筒中蒸食之謂之挂筒

其遺事亦見簡樸齊諧又記曰

今世五月五日作糶泪羅之

遺事莫能詳屈原姊所作

○河海抄云左近馬場

一條西洞院右近馬場

一條大宮也

公事原中

しよゆとともいへり唯在天皇の沖宮も

とゆふ今いへりていふ代ふの或はゆふ

其端午節

りよらま紀と食事とを若く幸成の恵子

五月又百小舟小舟と海をりりり何暮

風俄小舟と浪ふとやと水神と成

常々人をなやまはあらし人みさけい

てちゆきとして海平かむげのうは

み色り映結しとわふとれりあくと海神

人びたりとゆふとあらし舟若く難小あ

どとつりてえりりりい原の泪羅

あはと魚腹小舟寄しと祭し時を信

相りりともりや

五月二日いささる忘る法四日い右近り忘る

法五日い右近り忘る法六日右近り忘る

法七日右近り忘る法八日右近り忘る

法九日右近り忘る法十日右近り忘る

法十一日右近り忘る法十二日右近り忘る

今八 公事原中 九日

公事原中

○寂勝講 寬弘六年
以來被行也此前或行
或止不定也
○後朱雀院御時四天
王化現故御帳四角備
四大座云云
○雲圖抄云四天座異
良角定各可立然而行
道之間依礙道於乾坤
二角者與在平頭爾立
之故實也

於之えくびくく... 釋氏要覽上行香 普達王經云佛昔爲大姓家子爲父供養三寶父命子
傳香故知行香非始於今世

○江次第云米二百斛
左京百八十石
右京百二十石
讚岐百五十石
土佐百石
美作五十石
已上永官旨四月内
可進但庸米可充
之
鹽廿六斛 左十八石 右八石
下宜前於官内自大
膳下之
著欽○延喜式二十九
囚獄司式凡罪人者隨
罪輕重著欽若盤柳
公私倉舍盜私鑄錢
類之類居作者自著欽
雜犯徒罪之其馱或四
類著盤柳
人或三人爲連至暮著
粗明且脫而夜之

九十一 賑給 寅申及穴日不... 云云
小野官説シコウト讀之
京中北條里小路... 非遠使子く
是とひく米... 事乃作之
大陣小決き... 是とそ母欽天...
御宇より... 事喜乃月... 子余
廩をひききて... 者小孫... 小
事終紀乃月... 行... 也
九十二 著欽改 ○欽大計切音案以鎖加足在頸日鎖在足日欽

公事根原中

三三

○月令孟夏之月斷簿
刑決小罪出輕繫

○素盞烏尊千座置戸
○神代卷上云諸神歸

罪過於素盞鳴尊而稱
之以千座置戸遂促微
矣私記座者置物之名
言千座置積被物也戸
積置物便為其戸令罪
人出其中故曰置戸纂
疏戸詞助無意義三言火
所出也出其物故曰戸
○江次第抄今案御帳
再問為大床子間也

事なり元明天皇遠御宇和銅より下
まろ月令れ奉文には孟夏六月より
しとみくされと四月の御願にて非事
しとみくされは五月子よりしとみく

六月

御贖物

是は一日より八月までありしとみく
まろの御願にてまろの御願にて
けと指ありとふりりしとみくありと
ありて御いしと入系也弘仁五年六月

御贖物と奉
まろの御願にてまろの御願にて
けと指ありとふりりしとみくありと
ありて御いしと入系也弘仁五年六月

御贖物 同日

内膳司より奉りしとみく麻子法御座にて
供とあり也景初天皇御宇御願より
忌火とい火をいせしなり御事なりと
冬不澤乃火といしとみく奉りしとみく
次御令食を御願と今日よりしと
りしとみく

公事根原中

十一日

又選七命註竹葉酒也本草綱目二十五竹葉酒治諸風熱病清心暢意淡竹葉煎汁如常釀酒飲

○古事記中卷品詔和氣命坐輕島之明宮治天下云知釀酒人名仁番亦名須之許理等渡來也故是須之許理神入御酒以獻云云

ヤシラリ酒の八醞酒ト昔八度醞ラカケ酒也酒氣ヲ列セシ爲也此酒ヲ八岐大地ニテテ酔シテ軒殺シ稻田畑難ラ免シ玉ハリ神代卷詳也

○五月 小廿七日延曆寺六月會始 七ケ日 見古曆 ○元亨釋書第一釋家澄世姓三津氏近州滋賀郡人也云弘仁十有三年春二月賜宸書傳燈大法師位記夏六月四日於中道院右脇而寂年五十有六云貞觀八年秋七月敕蓋傳教大師

○古語拾遺云至千難波長柄盡前朝白鳳四年

九十五 供養酒

同日

一 櫻さけとよきふはくまはあまの徳と
かり一 櫻さけとよきふはくまはあまの徳と
酒とりなり又いこざけとも或又ふゆり
昔の口の中ふ米と嚼て宿とるく酒の徳を
あやこ法酒の遠酒酒きふゆり七月初日
まで日毎うまふなり夜神一天皇を清
めゆりうまふなり酒とほらふ事
まいゆり百海乃人ゆりてはくまはあ
めゆり酒とるさきな酒とふゆり

と人ゆりて作代り素戔尊の孫田
姫れさあふ大地とゆされし時八ヶ
折る酒を作らる事神代よりゆきか
り酒の事神代よりゆきか

九十六 延曆寺六月會 四日

是の傳教大師の忌日也勅使登山名海
延曆寺の延曆年中よりつれづれ
多号ふ付くは名残えり

九十七 御聽御下 十日

神祇官友人一日より今友ふこよりて先

根原中

根原中

年以小花下齋部首作

賀斯拜神官頭伯也神祇

今掌叙王族官内禮儀

婚姻上莖事夏冬二季

御卜之式始起此時云

○此御上龜卜也朝野

羣載第六御體御上

奏狀アリ

○式云月久祭 奠幣

案上神二百四座並大

○上卿着北廳座

木綿實基本紀云木綿

謂以裁木作白和幣名

號木綿天神七代地神

五代補人等著木皮藤

編緣也潔齋之日清淨

之祭服是其緣也

○御巫廻見幣物三人

出自西屋始自伊勢三

百餘所

稱今食○日本紀私記

云古者謂木爲御故今

云神今食者古謂之神

今亦矣必以木爲喻者

シシコシキ

○拾芥中末云中和院

内裏西号中院神嘉殿

奉 祭社稷神所

○御巫廻見幣物三人

出自西屋始自伊勢三

百餘所

稱今食○日本紀私記

云古者謂木爲御故今

云神今食者古謂之神

とくうらふふとるき

て奏すとは是いそと

鳳凰鳳當作雅

白鳳鳳當作雅

六月十二月兩月必行ル

神事故く上云毎月上心三六

十一日

○神祇官行

内東玄換小若く信

次小庭小津若く事

掌祝詞と祝師祝志

友心人の礼本御と

薦座小とりく神

終ハ六月十二月小

終終小事也弘仁

九十九

神今食

同日

御神事ハ一日り

幸有之先大忌

乃く陣小若く

カミとと小忌

清くりり

即記史卜小あひ

後醍醐年中行事

辨字アリ

少納言

小忌ととき

小忌ととき

小忌ととき

小忌ととき

小忌ととき

小忌ととき

小忌ととき

葱花○御即位和字記

云葱花大キ花分多金
ニテ行テ御輿上ニスヘラル
是ハ御神事時ノ行幸
スル御輿也

神嘉殿

○拾芥中未神嘉殿中
和院正殿

時ヲ申ス

○年中行事ニ云下アリ

圖同○江次第抄云關
司掌官閣管鑑及出納
之事故開門之後分居
左右監護羣官之出入
也

打掃官方枕○延喜式

第三十八掃部寮式

西烈官人己下掃部己
上ト食人十人持御座
等物自大堂宮北門入
鋪白端御幣十一枚布
端御坂枕一枚於悠紀
正殿中央又設打掃布
一條納揚
又坂枕一枚長二尺五
寸廣三尺
料編薦一枚生絲一兩
長功一人少半中功一
人大半短功二人坂枕
薦枕殿日本紀武烈紀
私記云師說古以薦爲
枕

司籠人も之れきうへし約幸力も時御輿の

江次第云有行幸時於中和院行無行幸時於神祇官被行

葱花をのり給り奏るり中 和院より

白木大床子立御座白縁也ナリ

約幸ありて神嘉殿に大床子に御座不

つら給給し御座不後案女時をり内侍

髪あげて神殿小ありの寝具を供む

可神之云

こ終りのささるを供むはくを殿に奉

る陣を引開の園司をとりてくを御

神殿を前小供するなりを右をり中

わざりく一人をみみてくをねきり奉

とくをく南戸を右に候かきり奉

ちりひを箱さく枕に重宝のくくを奉

掛

儀辨か細云外記史次才り乞と供と也

へり入あまはゆきんひくをく神座を

あま南枕ふくく先一丈二尺供くを具

ふふ六尺のくくみ四でう枕りく二枕り

あり其ふふ九尺れ中七作くくく八重

くくくくく九尺を中一作といくく奉

奉きいてくくくくくひ供くく供く

打

拂

管

さの枕に八重をくく下小枕くくく内

侍きりて御座をくく八重をくくく小

なり伊勢天照大神と初詣しこれより天子
御まつり神饌と供物と分給ふり也
元正天皇
悉二月六月より一也

百 供解御沖粥 十二日

昨今食は清きなりわたまふ心清く
糸書沖座乃大床子とを臺盤一脚とたて
供正のゆかり付小とを 紙布乃沖汁
物とへる二食にて沖若とへるをい
御手水は沖とあり同たへるは
米けく大床子とありはてく菊し

江次第三詳

沖の江次第第二云藏
人供御粥高盛也
次又供和布汁物以上
器
大床子 〇後醍醐年中
行事云大床子北ニヨ
テ南向ニ御手水ヲ置
テ御手水義ヲ供ス床
子ニニ案ニホタラヒスヘシ
ク其南ニカイル上ホトキ
御手水ヲ柄抄ニタリ御
手水 一工器下ノキウニ

シラナシヲク其南ニ脚
ヲタテ御手水ヲク配
膳人三柄抄カケテ後御
手拭ニイ

〇今祇園觀慶寺感神
院之地
〇新千載 顯詮
千ハヤル神園フユラタスキ
カケテイケ代ノ未守ルシ
〇諸神根元抄圓融院

り清く御手水乃具とたきて御手水
かい義あり次小茶よとをいへる御手水
一清くありはてめ
ひきて三あり阿ゆき清くまは神今食
りて清く二百小清ありは神はあり心
事り也解舟乃沖とをいへる供して
冬神神ありはてめ

百一 祇園御靈會 十四日御靈會也七日神興
御依所出七ケ日十四日
御靈會行也

二儀系は日ハ林沖か
言部秘訓抄第四御靈會馬長以下裝束事建久元六十四記云今日祇園御靈會也頭
る長るといへるは
是宗頼朝臣馬長騎二騎不似此儀之由有難人言是父祖之例云云
蘇芳云云

天祿元六十四始御靈
會自今年行也

○峯相記播磨廣峰ヨリ
ウシタリアリ

○南海上琉球國ヲ云歟
○蕪民將來巨且將來
琉球人云今越來親
方ナト云名ヲナリ

○牛頭天王蘇民將來
等事 蕪民傳ニ載
リ備後國風土記ヨリ出
ル事ナハ古ヨリ言傳タ
ル事トキコナリ

直指秘傳抄第十二神
代外録曰ソサヲ尊根
國ニタリトフ時雨ニテ風
ニフカレ卒苦ナクヨリテ
宿ヲ諸神ニカリタヘトモ
諸神ニルサス時ニクツ
國ニ蕪民將來巨且將來

トイハル兄弟ノ者アリ
蕪民家貧ケレトモ情愛
惠也巨且家富ケレトモ
心情不仁也素多嗚尊
先宿ヲ巨且カリ玉ヘリ
巨且カレ奉ラス蕪民ニ
カリタヘレカハカレ奉リス
且又奉養饗宴産分ノ
及所ヲ盡サリ素多嗚尊
此ヲイウヨロコトヲハニシ
カニシテカ恩ヲ謝セトホ
シメス時其夜アハハノ國
リ暴疫鬼來リテ國民ヲ
ホロホサントス草薙其事
ニロシメテ蕪民ニ告グナ
ク此夜此所ニ惡神來レ
ヘシフレン者亡敗ス我其
禍ヲ除ク方ヲ知リ汝等及
家内ノ者等茅輪ヲ帶
シ然ラハ禍染著ルナ能

公事根原

所説イカニ一祇園心社自記十一子小託言

根元抄云昔常住寺十禪師圓如大法師依神託貞觀十八年奉移山城國愛宕
郡八坂郷樹正其後昭宣公感威威驗壞運臺宇建立精舍

素交馬方カニ奉部トシテ牛頭天自來武塔
天神ともイカニ昔武塔ニ社南海ノ女
子トイハレハ明クイリ書テ武塔
所ニ小託言トシテ小託言トシテ
民將來巨且トイハレハ二人者あり兄弟トイ
あり一ツ兄トイハレハ一ツ弟トイハレハ
ト神座トイハレハ小託言トイハレハ

今按直指秘傳抄ニ蘇民將來故事ノ神代事トイハレ
此事備後國風土記ニ

トイハレ兄弟ノ者アリ
蕪民家貧ケレトモ情愛
惠也巨且家富ケレトモ
心情不仁也素多嗚尊
先宿ヲ巨且カリ玉ヘリ
巨且カレ奉ラス蕪民ニ
カリタヘレカハカレ奉リス
且又奉養饗宴産分ノ
及所ヲ盡サリ素多嗚尊
此ヲイウヨロコトヲハニシ
カニシテカ恩ヲ謝セトホ
シメス時其夜アハハノ國
リ暴疫鬼來リテ國民ヲ
ホロホサントス草薙其事
ニロシメテ蕪民ニ告グナ
ク此夜此所ニ惡神來レ
ヘシフレン者亡敗ス我其
禍ヲ除ク方ヲ知リ汝等及
家内ノ者等茅輪ヲ帶
シ然ラハ禍染著ルナ能

トイハレ兄弟ノ者アリ
蕪民家貧ケレトモ情愛
惠也巨且家富ケレトモ
心情不仁也素多嗚尊
先宿ヲ巨且カリ玉ヘリ
巨且カレ奉ラス蕪民ニ
カリタヘレカハカレ奉リス
且又奉養饗宴産分ノ
及所ヲ盡サリ素多嗚尊
此ヲイウヨロコトヲハニシ
カニシテカ恩ヲ謝セトホ
シメス時其夜アハハノ國
リ暴疫鬼來リテ國民ヲ
ホロホサントス草薙其事
ニロシメテ蕪民ニ告グナ
ク此夜此所ニ惡神來レ
ヘシフレン者亡敗ス我其
禍ヲ除ク方ヲ知リ汝等及
家内ノ者等茅輪ヲ帶
シ然ラハ禍染著ルナ能

公事根原

神

蘇民命ニシタカ其夜夕
 ニテ暴風トナリヌ明朝其
 所ノ人民悉ク病惱シテ
 或死或病キ尊又蘇民
 告テノミク後世疫氣流
 行セトキ汝ガ子孫家門
 題ニ蘇民將來子孫禍
 書シ只芝輪ヲ門楣ニ
 懸ヘシ然ラ公疫氣ノ禍ヲ
 ニヌカレト世俗今門額
 蘇民將來子孫處ト書
 ハ此故事也

かろりとれしまよとての後疫癘天下小
 なるん時ハ蘇民將來子孫をりといひ
 く茅丸輪とくけはく世世蘇民のつとむ
 のつとむしきらふや又祇園を縁記小のまて
 のまて又立るの小小國ありぬ相いさむ
 其國乃中々宮あり春祥といふ其園此
 中々城あり城小五何つて半乳天皇し
 つつ又武塔と神といふ沙湯羅龍を
 女と居しして八王子とて八萬四子と
 五十四神の眷属ありといふり神靈會の時

四條京極とて粟乃沖級を奉らハ蘇民將
 來乃忠孫とて奉る

貞一 祇園陰時祭 十五日

沖禊を儀儀大く平野小野とて
 ひ殿と立儀東極とてまて新宮とて天保
 元年六月らりて又々又々又々
 勅樂をありとて延三年乃事此
 事小いし

高圓融院

七五崇徳院

○諸神根元抄云天延
 三六十五始被奉走馬
 勅樂東遊御幣等使左
 少將藤理兼左右御馬
 有五尺左右近官人供
 奉東遊歌云神風八坂
 ノ里ト今ヨリノ君ガ千歳
 計始ハ此後中絶崇徳
 天治以後毎羊相續

神代卷云八坂瓊之五百箇御統纂疏八坂出玉之地
 君乃子年いりて人しとて

